

# 「往古奥州道」は「大河の自然堤防（跡）上」の古道

秦野 秀明

## 1. 「史料」における「往古奥州道」

江戸時代後期の文化年間(1804～18)より文政五年(1822)に至るまでに成立したと推定されている福井 猷貞『越ヶ谷瓜の蔓』(注1)では、  
「**往古奥州道** (江戸時代後期から見た大昔の奥州道)」の経路を「**南百西方堤**  
**通**」と記載しています。

つまり、

現・越谷市内の旧・南百村より旧・西方村に至る区間は、「元荒川 (利根川本流) 右岸の自然堤防上」の古道を、「往古奥州道」の経路として記載しています。

## 2. 江戸幕府作成の「国絵図」における「往古奥州道」

この区間の経路の記載を証明するものとして、

『越ヶ谷瓜の蔓』に記載された「往古」に相当する江戸時代前期しょうほうの正保元年(1644)に幕府より作成が命じられた「正保国絵図」(注2)があります。

この「国絵図」における現・越谷市内の旧・南百村より旧・西方村に至る区間は、「元荒川 (利根川本流) 右岸」にぴったりと沿うように「赤い線」で「往還 (道)」が描かれています。

## 3. 「地形」から見た「往古奥州道」

国土地理院の「地理院地図 (電子国土 Web)」(注3)には、「自分で作る色別標高図」があり、任意の「標高区分」と「色別け」を行うことによって、土地の僅かな「高低差」が良く判るデータとして入手することが可能です。

現・越谷市内の旧・南百村より旧・西方村に至る区間は、「元荒川 (利根川本流) 右岸の自然堤防上」及び「同河川の旧河道と推定される左岸・右岸の自然堤防上」以外は、標高 3.5m にも満たない低地が広がり、『越ヶ谷瓜の蔓』に記載された「往古」に相当する江戸時代前期より以前の時代に、「往還 (道)」が存在したと推定することが難しい「地形」となっています。

さらに、『越谷市史 第一巻 通史上』(注4)によれば、旧・南百村や旧・西方村を含む越谷市大相模地区おおさがみには、歴史時代に入ってから広大な「大相模沼」が存在したことが記載され、『越ヶ谷瓜の蔓』に記載された「往古」に相当する江戸時代前期こうはいしつちにおいても、「大相模沼」の存在は不明ながらも「新田化」が行われる以前の「後背湿地」が広がっていたことは、「自分で作る色別標高図」のデー

タからも疑いのない事実と云えます。

つまり、

「史料」や「国絵図」における「往古奥州道」の経路と同じで、現・越谷市内の旧・南百村より旧・西方村に至る区間は、「元荒川（利根川本流）右岸の自然堤防上」に「往古奥州道」が存在したと推定することが、「地形」的にも合理的に説明の出来ることとなります。

#### 4. 「先行研究」における「往古奥州道」

「論文」においては、「冒頭」において「先行研究」の成果を記載することが研究における鉄則となりますが、本稿では便宜的に「文末」に記載致します。

以下は代表的な「先行研究」の成果となります。

1. 本間 清利 (1975) 「日光・奥州道中の成立」『越谷市史 第一巻 通史上』  
越谷市役所 pp. 550-553  
「千住・八条・大相模を経て瓦曾根の荒川堤防上を進み」
2. 本間 清利 (1975) 「千住・栗橋間奥州道の変遷」『日光街道繁盛記』  
埼玉新聞社 pp. 10-17  
「当時この奥州道は、越ヶ谷町の旧記『越ヶ谷瓜の蔓』によると、千住から大原通りを経て八条に至り、利根川の堤防上を柿ノ木・別府・四条・南百と進み、これより荒川堤を大相模・瓦曾根を<sup>のこ</sup>通って越ヶ谷に出たとある」
3. 埼玉県立歴史資料館 (1982) 「中道（奥州道）」『埼玉県歴史の道調査報告書 県内鎌倉街道伝承地所在確認調査報告書』埼玉県教育委員会 pp. 7, 8  
及び附図 p. 3  
「越谷市と吉川町の境界吉川橋で西に折れ、元荒川沿いに越谷市相模、本町、野島を経由して来る道である。越谷市では、この道を奥州道と呼び、また八潮でも同様に奥州道あるいは奥古道の呼称を遺している」
4. 川口市教育委員会編 (2005)  
『越谷道をたどる 赤山街道総合調査報告書2』  
川口市教育委員会 pp. 1-41  
現・越谷市内の旧・南百村より旧・西方村に至る区間の内、旧・西方村村内の「現・不動橋」南詰付近より西側の経路及び「現・越谷市道 2200 号線」、「現・越谷市道 40336 号線」、「現・越谷市道 80585 号線」、「現・主要地方道 越谷・流山線」に凡そ沿った明治 13 年 (1880) 測量の「迅速測図」に記載される古道を、「赤山街道」の「枝道」として「定義」させました。
5. 小峰 俊彰 (2010) 『地域を見る目を養う教材開発の工夫

越ヶ谷宿の成り立ちと街道を行き交う人々に着目して』

埼玉県教育委員会 長期研修教員報告 平成 21 年度 pp. 6. 7

「中世においては鎌倉街道中ノ道が奥州方面への主要な交通路であり、越ヶ谷を通る元荒川自然堤防上の道は回り道のような性格があったのかもしれない」

「自然堤防上には古くから集落形成の痕跡が見られ、[中略]律令時代の条里制がこれらの自然堤防上に展開していたことが推定される。上の「奥州海道」もこの自然堤防上に作られたものである」

6. 加藤 幸一 (2011) 「江戸時代以前の越谷を通る古奥州道 (一考察)」

『古志賀谷』第 16 号 pp. 17-26

<http://koshigayahistory.org/349.pdf>

「南百から西方にかけての元荒川の土手道は、ほぼ昔のままに留めていると思われる。中川沿いの八条堤より、引続き元荒川沿いの土手道を西に進んだのであろう」

7. 秦野 秀明 (2011) 「「往古奥州道」と「押立堤」について」

『古志賀谷』第 16 号 pp. 27-38

<http://koshigayahistory.org/239.pdf>

『越ヶ谷瓜の蔓』に記載された「往古奥州道」における「通」と「通り」の「意味の違い」の「定義」を確立させ、加藤 幸一 (2011) においてもその「定義」が「引用」されました。

『越ヶ谷瓜の蔓』に記載された「往古奥州道」における現・越谷市内の旧・南百村より旧・西方村に至る区間は、

「南百角と西方」と記載されています。

8. 加藤 幸一 (2018) 「平成 30 年度郷土歴史講座 越谷市制施行 60 周年  
大相模地区西部の歴史」

[http://koshigayahistory.org/h30\\_lectures\\_in\\_the\\_library.pdf](http://koshigayahistory.org/h30_lectures_in_the_library.pdf)

「大相模郷より越ヶ谷町の中町までの往古奥州道」と題した加筆した地図が、2 点収録されました。

川口市教育委員会編 (2005) で「定義」された「赤山街道」の「枝道」も、「古道」として「加筆」されています。

9. 加藤 幸一 (2023) 「令和 5 年度郷土歴史講座

江戸時代以前の越谷を通る奥州古道 (令和 5 年改訂版)」

「南百の角より大相模の西方村へ進む奥州古道 は、中川 (古利根川) 沿いの八条堤より引続き元荒川沿いの右岸の自然堤防上を西に進んだのであ

る」

「元荒川に沿って江戸時代から続く自然堤防上の古道がある。これも奥州古道である。南百の角から吉川県道（大相模不動尊通り）を通過して東埼玉道路を突っ切り、浄音寺の前を通過して大相模保育所バス停に向かって進む古道である」

川口市教育委員会編（2005）で「定義」された「赤山街道」の「枝道」を、『越ヶ谷瓜の蔓』に記載された「往古奥州道」とは別の名称である「奥州古道」として記載されています。

残念ながら、本稿の「1. 2. 3.」で考察してきましたように、川口市教育委員会編（2005）で「定義」された「赤山街道」の「枝道」の中で、「現・不動橋」南詰付近より西側の経路以外は「自然堤防上」ではないために、加藤 幸一（2023）で記載された「奥州古道」は、江戸時代前期より以前から存在した「古道」であるということは、ほぼ無いと推定出来ます。

以下は、管見の限り「先行研究」の見当たらない筆者の仮説となります。「寛保2年（1742）の大水害」及び「天明6年（1786）の大水害」以降に、「元荒川（利根川本流）右岸の自然堤防上」に存在した「往古奥州道」の「バイパス道」として「新たに建設」されたのが、川口市教育委員会編（2005）で「定義」された「赤山街道」の「枝道」である「古道」であると推定しました。

この仮説を補強、補説することが、今後の筆者の課題となります。

（注1）（1972）『越谷市史 第四巻 史料二』

越谷市役所 pp. 44-78

「[前略]慶安以前元道中ハ、千住方大原通八条堤方南百西方堤通  
瓦曾祢溜井堤方六本木中町横の筋往還成しを、[後略]」

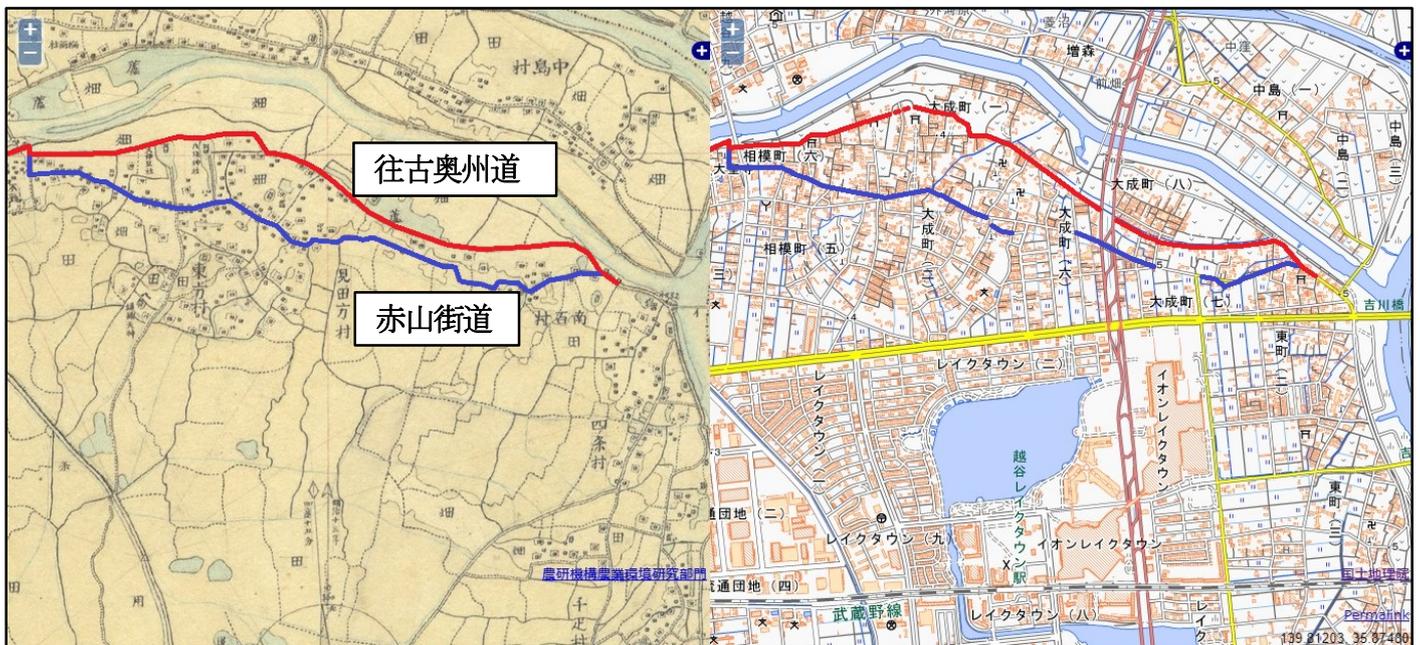
（注2）東京市役所編（1994）『東京市史稿 市街篇 第6』附録

復刻版\_臨川書店

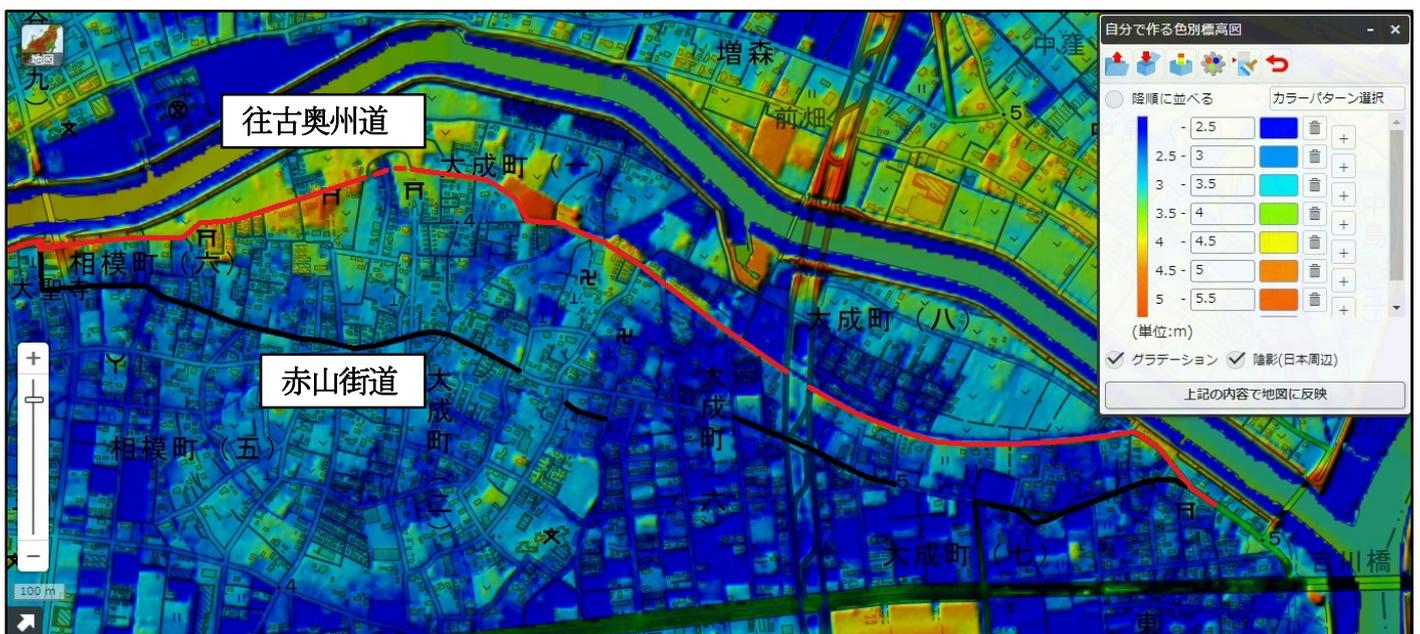
（注3）<https://maps.gsi.go.jp/#5/36.104611/140.084556/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1g1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f1>

（注4）新井 鎮久（1975）「自然堤防の発達と湖沼の形成」

『越谷市史 第一巻 通史上』越谷市役所 pp. 47-50



△ 農研機構 農業環境研究部門 「歴史的農業環境閲覧システム」  
「比較地図」  
向かって左は「迅速測図(明治13年(1880)測量)」  
向かって右は国土地理院「地理院地図」  
より加筆して引用：秦野 秀明



△ 国土地理院  
「地理院地図(電子国土Web)」  
「自分で作る色別標高図」  
より加筆して引用：秦野 秀明